

メルヴィル『レッドバーン』の語り手について

——『マーディ』との関連において——

中 村 紘 一

(一)

ロマンス的な傾向をもつ『マーディ』の後に発表されたメルヴィルの『レッドバーン』(*Redburn, His First Voyage*, 1849)の最後の文では、主人公のレッドバーンは、イギリス人の友人ハリ・ボルトンの、捕鯨船での事故死を知らされた後、次のように結んでいる。

しかしながら、私、ウェリングボロー・レッドバーンは、この『私の最初の航海』の中で語られているどの場面にも増してはるかに危険な場面を経験した後、偶然にも生き残っているのであるが、ここで、この『私の最初の航海』は終りにする。^①

これは、物語の終りを告げる一見何げない文であるが、しかし、われわれがこれから扱おうとする問題に関連する時、かなり重要なきっかけとなる。

この作品が、メルヴィルの自伝的要素の強い作品であって、右の文中のウェリングボロー・レッドバーンとは、

実はメルヴィル自身のことであり、この作品では、レッドバーンがリヴァプールまで商船ハイランダー号の水夫として生まれて始めての航海をするように、メルヴィルが一八三九年二十歳の時、貨物船セント・ローレンス号の雑役夫としてニューヨークからリヴァプールまでの航海をしたことは、メルヴィルの伝記上周知の事実である。したがって、この作品は、メルヴィルのそのような経験を単に綴ったものにすぎないという解決も当然ながら可能なのであるが、しかし、それだけで済ませてしまつてそれ以上のことをこの作品で考察しないとするならば、失われるものは余りにも大きいように思われるのである。

例えば、まず第一に、この作品を単なる経験を綴つたものと見なすとしても、メルヴィルが、一人称の自分をウェリングボローという虚構の人物に仕立てあげていることは注目すべきことであろう。すなわち、このような虚構の人物に仕立てあげることによって、メルヴィル語り手は、過去の自分がある距離を置いて（つまり、幾らか客観的に）見る態度を執ろうとしているとも考えられるのである。同様のことは、右の引用文中では、「私の最初の航海」と語り手は述べているものの、この作品の正式のタイトルは『レッドバーン、彼の最初の航海』となっていることについても言える。人称は一人称から三人称に転換されているのである。さらに、この作品の章題についても、例えば、第一章では「ウェリングボロー・レッドバーンにおいて、海に対する好みはどのような生まれ育ったか」というように、やはり、その人称はすべて三人称扱いにされているのである。

これは奇妙な不統一である。というのも、右の引用文中からも判るように、この作品の本文では、すべて「私」という一人称を主語にした語りが行なわれているからである。作品名も章題の主語も当然一人称で記述されて然るべきだと思われるのである。やはり、これも、不徹底ではあるが、過去の自分に対する客観視の傾向の現われと見なしうるものなのであろう。

(一)

『レッドバーン』という作品は、その内容からみて、三つの部分によって構成されていると考えられる。すなわち、初めの二十六ないしは二十九章までは、レッドバーンのリヴァプールまでの航海を扱った部分である。四十章までは、リヴァプールを中心としてイギリスの田舎、並びに、ロンドンでの彼の体験が語られ、終章までは、リヴァプールからニューヨークまでの復路が語られる。（もっとも後で問題にすることであるが、リヴァプール到着までを前半、以後を後半と分けることもできる。）

これら三つの（あるいは二つの）部分における語りの視点は、繰り返して言えば、章題を除いては、すべて一人称の「私」（レッドバーン）がその体験を語るということになっている。例えば、第一章では次のように語られる。

私は当時ほんの子供にすぎなかった。しばらく前、私の母はニューヨークからハドソン川沿いの気持のよい村に引っ越して来て、そこでわれわれは小さな家に静かに暮らしていた。私は将来のために立てていた幾つかの計画において惨めな失望を味ったこと、独りで何かをやらねばならない必要があったこと、こういったことと私の生まれながらの放浪癖とが一緒になって、今や、私の心の中では、私は水夫として海に赴かねばならないという気になっていたのである。

この引用から、われわれは、この作品では、子供（少年）にすぎなかった私がどのようにして航海に出、そこでどのようにしてさまざまな経験を積むことになるかといったことが終始語られるのを予想し、そして、また事実、かなりの程度にそれが行なわれるのを知るのである。少年（つまり、私）の眼に映り、そして、経験した不

快・恐怖・悲惨なことがらが、活き活きと次々に語り続けられる。これらの経験は、言わば、少年の無邪気から経験エクスぺリエンスへの過程であり、また、「精神の修養 (improving my mind)」（十八章）のための機会であったのだ。

ということは、当然のことながら、ここでは、少年の意識があくまで語りの中心であったことになる。

ところが、この意識の中心という問題に関連して、これはかなり有名な指摘なのであるが、F・O・マシーセンは次のように述べているのである。

この作品の後半は、冒頭から予想される通りに進んでいるとは言いがたい。それというのも、メルヴィルは、意識の中心をレッドバーンの無垢に置き続けることを無視し、彼よりもはるかに年輩の者にしてはじめて可能なような考察を加えることによって、話を散漫にしまい、時には彼のねらった効果をばやけさせている。^⑧

ここでの前半というのは、先にも触れたように、レッドバーンのリヴァプール到着までのことであるが、このような、語りの意識の中心という観点からのこの作品の批判は、ノースウェスタン版の付録の「批評史注釈」が言うように、マシーセンが最初の口火を切ったものであった。

そのノースウェスタン版が同じく引用しているところであるが、マシーセンの指摘を承けて次に視点の問題を詳述したのは、ウィリアム・H・ギルマンの大著『メルヴィルの青年時代と「レッドバーン」』（一九五二）においてであった。

『「レッドバーン」の』破壊的とも言える欠点は、視点に混乱した変換があることである。メルヴィルは、少年の眼を通して世界を描き、少年のロマンティックで敏感な意識に対して経験というものが与える粗々しい衝動を伝えることから始めている。作品のほぼ前半を彼はこの視点に執着して、非常な成功を収めているのである。ところが、旅行案内書ガイドブックの件のは、彼の技法は失敗している。リヴァプールに関する叙述の多くは、レッドバーンの反応を時々探るといこともなく、以前の

月並な事件では強さと妥当性を与えていたところの少年の強烈な感情が活力をもたらすということにもなっていない。この失敗の後には、常に編集者的な方法に陥るという現象が続く。メルヴィルは相変らずレッドバーンの経験を題材に用いるものの、それは貧困、移民法、音楽、戦闘的教会における牧師の務め、約束された国としてのアメリカ、等々の話題に対する大人の論評を行なうためのきつかけにすぎないものになってしまっている。たといその論評が雄弁であろうとも、またそれがスウィフトの激しい義憤にしばしば類似するとしても、芸術的に見れば欠点なのである。それは、よく彫琢された芸術作品に必要な継続的發展と首尾一貫性を作品全体から奪うことになっている。

マシーセンもギルマンも、この作品の語り手の視点の変質を作品の弱点、あるいは、語り手（作家）の未熟性の現われと見なしているのである。例えば、語り手は「物語の中に全りにも多くのものを採り入れすぎている」、「それを描く能力がないような場面を描こうとしている」とギルマンは手厳しい。要するに、右の二人に共通する論点は、語り手の視点に変質がある——首尾一貫性に欠ける——というのがこの作品の欠点であることになっている。

(三)

ところが、この二人が欠点と指摘するところをより詳細に検討して、これを長所として積極的に評価しようとする見方が、その後に現われる。ロランス・トムソンのこれまた大著『メルヴィルと神の喧嘩』（一九五二）においてである。同書中で、トムソンは、単に視点に変質があるというだけでなく、それがはっきりとした三つの段階に分けて考えられ、この作品には決して一筋縄で解することのできぬ重層性をもった面白さのあることを指摘する。

「この作品の」主題は、始めて家を出た時の若者の経験というものをただ扱っているにすぎないが、物語を語るメルヴィルのさりげない方法によって、彼が自分の三つの精神的・知的発展の段階を確立し対照することを可能にしているのである。その第一は、家庭で教えられた宗教的理想主義を引っさげたレッドバーンが、邪悪な世界に直面し、その結果、理想と現実の齟齬を発見し、そのショックに苦しむという段階。第二は、今度は語り手としてのレッドバーンがこの「最初の航海」を回想し、「当時」の彼の考え方と「今」の彼の考え方（これは、依然として聖書を神の「黙示」録であるという子供の頃の信仰に執着している修正理想主義）との間の相違を比較することのできる段階。第三は、遺産として受け継いだカルヴィン信仰とさらには宗教的信仰一般とに対してメルヴィル自身が秘かに抱いている懷疑的・諷刺的態度やそして人間の生来の権利が自然に発現するのを阻害するような權威主義に対して發揮される彼の反抗的嫌惡^④。

ここで、トムソンが、右の「三つの視点の原理」というものを掲げたことは評価に値しよう。ただし、トムソンには当然のことながら彼特有のメルヴィル観があつて、それが右の三段階の分類にも、強く影響しており、トムソン流の濃い色づけがなされていることは明らかである。特に、三つ目の段階の見方は、言わばトムソンの独壇場であつて、彼のメルヴィル観について行けぬ者にとつても、偏見と誤解の何ものでもないということになりかねない。

四

このトムソン色の濃い分類に反撥してか、そして、ついでにこれまでの三人の論者に対しても一括して、マールン・ボーインは、次のような意見を述べて、どちらかと言えば技法面における作家メルヴィルを弁護することになる。

それぞれ、多くの啓蒙的な意見の持主であり、非常に洞察力に満ちた三人の論者（すなわち、マシーセン、ギルマン、ト

ムソン」が、この小説の語り手の視点についてかくも大きな誤りを犯しているのは、ちょっと考えてみると驚くべきことである。しかも、これが、メルヴィルが、終始、現在のレッドバーン、つまり、語り手と、過去のレッドバーン、つまり、主人公との間の距離を注意深く示唆している多くの徴候があるにもかかわらずである。……^⑧

ボーインのこの論文は短いものでありながら、かなり慎重で、どうかすると回りくどい言葉遣いと微妙な論旨から成っていて、仲々直截に理解し難いところがある。そこで、再びノースウェスタン版の「批評史注釈」の簡潔な要約に沿って、その論点を整理してみるとおおよそ次のような主張となる。

まず、マシーセンが問題とする点については、この作品の語り手の「意識の中心は、ただ一つしか存在しない、すなわち、この物語を語る年輩のレッドバーンのそれである」とボーインは言う。そして、彼は、「作者のメルヴィルを作品の外に置いてみると、この年輩の語り手がメルヴィルの諷刺の対象となっているのではない」、というのも、この年輩の語り手とは「世界の美しい外見に幻滅を感じて以来幾久しいが、その結果挑戦的になるということもなく、かと言って、完全に諦めの境地にあることもない」賢明で成熟した人物であるからと考えるのである。ボーインは、このようにして、語り手に対する非常に好意的な見方をするることにより、先のギルマンの語り手が「編集者のな方法に陥っている」という批判を（メルヴィル自身の声が出しゃばりすぎている）のだというふうに解釈して、これは、実は、「成熟し人道的になった語り手に相応しい態度である」と弁護することになる。さらに、彼は、同じくギルマンの、作品後半には「少年の強烈な感情」が欠如しているという批判に対しても、これは（語り手としてでなく主人公としての）レッドバーンが急速に成長したためであると述べるのである。要するに、ボーインの考え方によれば、語り手の視点は始めから終始一貫して語り手にあり、その語り手が語る対象は、主人公としてのレッドバーンであり、この主人公としてのレッドバーンと語り手との間には、最初には

つきりとした距離が存在しているが、物語が展開するにつれて、主人公は急速に成長し、その結果両者の間の距離は狭まり、最後にはそれがなくなってしまうことになる。このように考えることにより、ボーインは、マシーセンやギルマンの批判、そしてトムソンの（機械的とも見える）三段階説に反論を試みたのであった。ボーインの反論の仕方には、語り手と主人公をはっきり分けて考えたこと、さらに、主人公の急成長という考え方を導入したことに特徴があるのであるが、しかし、これに對して、前者に関しては、それならば、物語中に終始行なわれている「私、レッドバーン」という語り口は「彼、レッドバーン」のように三人称である方がより適切でないか（もっとも先に述べたように、作品名、章題はすべて三人称となっているが）、また、後者に関しては、主人公の急成長の結果、語り手と主人公はほとんどあらゆる点で、すなわち、精神的な点でも一致するようになるとするこの論を煎じつめれば、主人公レッドバーンは最後には物語を語る作家になってしまうということになって、これは少々無理な考え方ではないか、といったような反論が予想されるのである。

(五)

ところで、ボーインのいう、この作品の語り手とはいかなる語り手なのか。彼が規定する、現在の語り手についての性格を列挙してみると次のようになる。

まず、この語り手は、先にも触れたように、「挑戦的でも諦めの境地にあるのでもない」こと、「苦勞と孤独も独りの不幸ではなく人間の自然の条件である」と認識していること。「善も悪も混じった人生全体を冷静に受容することで支えられている」こと。「急成長してしまった自己に共感を持てる」こと。「若い頃の無邪氣ナイウィイキを語る時の調子は、大抵、誰か他人に對するかのように優しく共感を持った寛大さが見られる」ことなどである。

ボーイン自身も例証しているように、語り手（すなわち、年輩の語り手）には、確かに右のような性格・態度が見られる。ボーインは、さらにそのうえ、この語り手の特徴を表わす形容辞として、「啓蒙エナライズされた」、「成熟した」といた言葉を再三使用して、その性格づけを行なっているかに思われる。また、この語り手とは、「人物としては主人公と同一人物であるものの、時間、視点、知識の程度といった点においては主人公とは異なっている懐想的語り手である」とも述べる。

しかし、ここでわれわれにとつて気懸りなことは、「啓蒙」といい「成熟」といい、さらにはその後で述べられている相違点といい、ボーインの挙げる語り手の特徴はどうかすると抽象的であつて、語り手についての具体的なイメージが湧いてこないことである。

さらに、ボーインの主張するもう一点、すなわち「主人公急成長説」についても問題がないわけでない。一般に成長というものには、方向性を伴うことは明らかで、主人公レッドバーンは、無知から「啓蒙された」状態へ、未熟から「成熟」へと成長して行くわけで、こういう方向をもった過程を描くことにこの物語の眼目はあることになる。ところが、ボーイン自身はその点については、次のように述べているのである。

「実は、少年が見せる反応がだんだんとわれわれの意識にのぼらなくなってくる。それは、彼の、幻想からの覚醒の過程が、大体完成してしまうと、彼自身が今や内省的でなくなってくるため、そして、語り手の物の見方と彼自身の物の見方の着実な統合点においては、彼の判断力と価値観が、年輩者のそれと鋭く対立しなくなるところに達してしまっているからである。」「（二十九章において）自分の孤独のどうすることもできない性質を少年が発見するとともに、作品は想像力の最高点に達して、その後の部分はせいぜいアンティ・クライマックスであるという一般的感情を無視することはできない。その後は、この作品は、明確な方向を失ってしまっているよ

うに思われる。」

したがって、ボーインの考えをもっと進めれば、この作品はここで（つまり、二十九章で）終わってしまった方がよいことになる。なぜなら、この時点ですでに若きレッドバーンの教育は完成しているからである。なぜ、その後を書き続けたかその理由は、ハリ・ボルトンを登場させることにより、レッドバーンの教育が完成したことを知らしめるための大きな手段とするためであるとボーインはいう。つまり、ハリ・ボルトンの、この作品における機能は、一口に言って、繰り返しだというのである。ハリ・ボルトンは、レッドバーンのものであった成長のための教育を繰り返していて、彼の旅路もリヴァプールからニューヨークへとというふうにレッドバーンの行程であったものの復路を辿っているにすぎず、また途中での無垢から経験へというハリ・ボルトンの成長過程もすべてレッドバーンのものに酷似しているというのがボーインの主張するところなのである。

しかしながら、右のような説明にかかわらず、ボーインの主人公急成長説にしたがえば、語り手にとって、すでにリヴァプールまでの航海で成長してしまった主人公レッドバーンの成長過程を、その後さらに語りの主題にすることができないのは明白なのである。今度はハリ・ボルトンの成長がその代用となるというボーインの説明はある程度までは首肯できるものの、その語りがややもすると退屈・冗長という性質を持った繰り返しとなり、ボーイン自身がいみじくも述べるように、アンティ・クライマックスであることには変りないことになるう。

果して、リヴァプールを始めとする英国滞在中の出来事と、リヴァプールからニューヨークまでの復路を語る語りの特色は、以上のようなボーインの説明だけで十分に言いつくせるものであろうか。そこで、「成熟し」「啓蒙された」年輩の語り手が「繰り返し」を物語るというボーインの説に加えて、そのうえさらに、これは決して目立ったものではないが、さりとて無視することのできない、もう一つの語りの特徴が、物語後半には見られる

のではないかというのがここでの筆者の論点としたいところなのである。

(六)

そこで、まず断わっておきたいのは、この語り手は、レッドバーンがリヴァプールに到着するまでの過程、つまり、ボーイン言うところのレッドバーン成長の過程を語る前半の部分においてすら、必ずしもそのことはかりを語りの対象としているのではないということである。

第十三章は、ハイランダー号が、ニューヨーク港を出てまだ二日目のことが語られるのであるが、語り手は、レッドバーンが船のロープなどの名称について学ばねばならぬことが非常に多くあるということを述べた後、次のような語り口をすでに見せているのである。

何かで読んだところによれば、かつて帆船の索繩には、植物学におけるような簡潔な分類があったとのことであるから、ここにその新しい名称表を作製しても悪くはない案だと私は思う。そもそもこの世界中にはどのくらい名称というものが存在するかはまことに驚くべきものである。外科医や解剖学者が人体のさまざまな部分に与える名称は数限りない。人体はまるで帆船のようなもので、骨格はピンと張った静索、筋肉は小さな動索で、それが船のすべての動きを操縦しているのである。

こういったすべて名称というものがなかったならば人類はうまくやって行けないものなのかと私は訝しくなる。これらの名称は、毎日、毎時、毎瞬、増加を続け、最後には、大気は名称で一杯になり、ちょうどガス灯がガスを消費してしまうように、人々が使う無数の言葉も大気を消費してしまうために、人々は大きな平野においてすらお互いが吐き出す息を呼吸するということになりかねない。人々は名称というものに大きな愛着を抱いているようなのだ。というのも、多くの名称を知っていることは、多くの物を知っていると考えられているからだ。もっとも、この世には物自体よりも名称の方がはるかに多くあるとしても私は驚くまい。だが、閑話休題、話を元に戻さなければならぬ。

これが、主人公レッドバーンの成長の過程についての語りとはほとんど無縁の、そこからは「逸脱」した、一般に物の名称というものに関する論評であることは、引用の最後の「だが、閑話休題、話を元に戻さなければならない」の文を改めて指摘するまでもない。

右の引用は、「成熟」し「啓蒙」された語り手が、主人公のリヴァプールまでの航海を語る途中に見せるほとんど取るに足らないほどのものであるかも知れないが、しかし、決して無視したくない逸脱なのである。

次に引用する語りは、今度は、主人公がリヴァプール到着した後、つまり、ボーインによれば、レッドバーンの教育が完成終了した後に行なわれるものである。

周りを広い石造りの帯に囲まれて、リヴァプールの船渠は、それぞれ城壁をめぐらせた町のようにあり、生命と人々の動きに満ち溢れている。いや、むしろ、それは小さな群島であり、世界の縮図であって、そこではすべてのキリスト教国、そして、すべての異教国すらも代表を送り込んでいるのだ。というのも、それぞれの船は、それ自体で一つの島であり、それが属する国の漂流居領地であるからだ。

ここには、世界の涯のものが集積される。まるでマストの大議會であるかのように、これらの船の円材や角材には、地球上のすべての森林の代表が送り込まれている。カナダとニュージラランドは松材を、アメリカは生の樅材を、インドはチーク材を、ノールウェイはえぞ松を送り込んでいる。ホンジュラスとカンペーチュ（訳注、メキシコ南東部、ユカタンの半島の基部にある州）の代表であるマ호가ニー材閣下は、乾輪の傍で任に就いているのが見える。ここでは、商業の神の恵み深い支配力の元に、すべての地域や国々が抱き合い、桁端（うしろたえ）と桁端が兄弟愛の中で触れ合っている。（第三十三章）

リヴァプール港のドックに関するこの論評も、主人公レッドバーンがリヴァプールに到着したことにかこつけて行なわれたもので、それまで行なわれてきた主人公の教育・成長の過程の語りとはほとんど無関係なものである。かと言って、これが、リヴァプールまでの航海で「未熟」から「成熟」へ（あるいは「無垢」から「経験」

へ)の教育を終えたばかりの主人公レッドバーン自身が成しうる感情でもない。これは、この物語を語り続ける語り手の、レッドバーンの話とは独立した、リヴァプールという港に関して行なわれた想像力の發揮ないしは戯れと考えるべきものであろう。(メルヴィルの前の作品『マーディ』に関連して言うなら、この部分は、あの「逸脱」の幾つかの章のうちのいずれかに類似し、そして、後の作品『モウビー・ディック』との関連で言うならば、ここに述べられているリヴァプールのドックに見られる全世界性ユニヴァーサルと呼ぶべきほどのものは、さまざまな人種が乗組んでいるピークオド号に通ずるものがある。)。

このようにして、先に触れた、物語の後半は前半の繰り返しにすぎないというボーインの主張にもかかわらず、その後半には、前半に一個所を除いてほとんど見られなかったような論評が語り手によって行なわれることを、ここでははっきり指摘しておきたい。

次の引用は、ニューヨークの移民船がドイツ人移民を同じくリヴァプール港から輸送するのを目撃して行なわれた論評であるが、ここでもアメリカという国の「全世界性」という神話(?)を強調するためのカタログが並べられることになる。これもまた、やはり、主人公レッドバーンの成長過程とは、言わんや後に登場する、彼の英国の友人ハリ・ボルトンの成長過程とは何の関わりを持たないし、ましてや、両者自身のいずれかがなしうる論評でもない。このかなり長い論評は語り手特有の学識と想像力が發揮される語り手自身の独壇場なのである。

アメリカが植民されてきた方法を熟考してみる時、民族的な好悪といった偏見を、崇高な人の心には、永遠に消滅させてしまふ何かがある。

アメリカは、すべての国の民によって植民されてきたのであるから、すべての国々が自分の国であると主張することができる。アメリカ人の血を一滴流すということは、全世界の血を流すということなのだ。イギリス人であれ、フランス人であ

れ、ドイツ人であれ、デンマーク人であれ、スコットランド人であれ、アメリカ人を笑いものにするヨーロッパ人は、自らの同胞をやくざ者と呼ぶことになって、天罰を受ける怖れがある。われわれは、頑固な民族意識を持ったヘブライ人のような偏狭な民ではない。――彼らの血は、われわれの中であって、排他的な世襲制を維持することにより高貴なものになるうとして、かえって卑しいものになってしまったのだ。そうなんだ、われわれの血は、アマゾン河の大水であって、それはすべてが一つに流れ込んで行く何千という気高い流れから成り立っているのだ。われわれは一つの国家というよりも世界なのである。なぜなら、メルキゼデク（王で、祭司。）（（王で、祭司。））のように、全世界をわれらの父祖と主張することができないのなら、われわれには父親も母親もないことになるからである。

というのも、われらの父親と母親とはいったい誰だったのか？ それとも、われわれは、われらの創建者としてロムルスとレメス（（王で、生後間もなく捨てられ、狼に育てられたと伝えられる。ローマの建設者で最初の国王。））のような者を指摘できるだろうか？ われらの祖先は普遍的な父祖の中に消えている。それゆえ、シーザーとアルフレッド大王、聖パウロとルター、ホメロスとシユイクスピアは、ワシントンと同じくわれらの父祖である。またワシントンは、われらの父祖であると同じく世界の父祖であるのだ。われわれは、すべての時代を相続し、われらの遺産をすべての国民に分割する。この西半球では、すべての民族と国民は一つとなって、連合した全体にまとまりつつある。疎遠になったアダムの子供たちがいにしえのエデンの炉辺に戻るのを見ることのできる未来がやがて到来しよう。

信心深い人たちが、コロンブス以前に、希求した天国は、新世界に発見されたのだ。そして、最初に水底に届いた測鉛はこの世の楽園の土をすくい上げてきたのだ。それは、その時、いや現在でも本当の楽園ではなかったのだが、神の思召しにより、時が満ち熟する時には本物の楽園になるだろう。種は播かれたのだ。穫り入れの時が来るに違いない。われらの子孫たちはみな、世界の祝典の朝、鎌を持って穫り入れに出かけることであろう。その時には、バベルの呪いは取り消され、新しい聖霊降臨が到来し、彼らが話す言葉は英国の言葉（（英語））ということになるだろう。そして、フランス人、デンマーク人、スコットランド人、それに地中海沿岸とその周りの地域の住人たち、すなわち、イタリア人、インド人、ムーア人、こういった人たちには、裂けた炎の舌（（王で、新約使徒））（（王で、新約使徒））が現われるであろう。（第三十三章）

この論評の特徴は、語り手の思弁が空間と時間を自由に往来していることであろう。これは『マーディ』の第二、第三の「逸脱」の章の思弁の特徴に大いに似通っていることをここでは指摘しておきたい。

次の引用も、物語の後半（五十五章）において、ハイランダー号の乗組員の一人で不気味な嫌われ者の悪人（？）ジャクソンの生涯を語る際に行なわれる語り手特有の「悪、ないしは悪人」論である。この論評の導入部分こそ、ジャクソンという物語の登場人物に関連づけられてはいるものの、その後は語り手の思弁の自由な展開が見られるのである。

……そして、ティペリウス（現在、ローマ第三代）はローマ皇帝として君臨し、無類のタキトウスがその遺体に香を塗るということがあったけれども、私はこのヤンキーのジャクソンを十分威厳があり歴史上立派な悪人に値する人物としてありのまゝにお話する。もっとも、彼は碑名もない無名の放浪者であったので、私を除いて誰も彼のありのままを話すことはできないのはあるけれども。彼を立派な悪人としてお話するのは、紫衣をまとう者であれ、ボロを着ている者であれ、悪事に関しては高位高官はないからであり、また、地獄とは悪人たちの民主国であって、そこではすべての者が平等なのだからである。そこでは、皇帝ネロも、手下の悪人どもと並んでわめき声をあげている。もしナポレオンがただの軍事的殺人者にすぎないのなら、私は極悪人に敬意を払うことがないのと同様に敬意を払うことは全くない。ミルトンの描く悪魔は賞讃を得てわれらが抱く憎悪の念を希薄にするけれども、それはひとえにその悪魔が純然たる悪魔でなく、元の悪魔から改変されたものになっているからである。われわれがこの悪魔に関して何かしら高尚な想像をめくらせるとすれば、それは四つの福音書を読むだけではできないことなのだ。そこからは、悪の本質を単に人格化したものとして悪魔を知るだけである。すりや強盗の他に、いったい誰がそんなものを賞讃しようか？　だが、このことは、われらの詩の高僧ミルトンに対する評価を貶めるものではない。ミルトンが、題材としてこのような純然たる悪を用い、最高の構築物を作り上げたことは、彼の評価を高めるのみである。

しかし、地獄に堕ちた者をこの世で歴史的に讃美し、有名な悪党を賞揚・称讃するのは、われわれが悪事の例を数えあげ、野心ある者に何か大悪事を働いて名声を確保せよと呼びかけていることに他ならない。

この「悪、ないしは悪人」論がややもすると逆説的論理を弄ぶ傾向にあるのは、これまた、『マードイ』の「逸脱」の章における信仰論に通ずるのを、ここでも示唆しておくことにする。

次の、最後の引用は、ハイランダー号でニューヨークに向かう移民たちが悪性の熱病に罹かって次々に死亡し、人々の間に恐慌状態が生じたことに際して、語り手が行なう論評である。これも物語の進行とは直接関係を持たない、語り手の学識と想像力がひたすら現われ出た語りの部分として、やはり読むべきものであろう。

そして、もし、死の恐慌状態にある群衆の極端な恐怖心が十分根拠のあることと判明したならば、彼らはその時は実際に死に瀕しているに違いないのだから、それゆえ、そのような時には、死ぬか、それとも、生き残って仲間とその恐怖心をあざけられてもよいかの覚悟を決めなければならないことになる。というのも、死にさらされた特別の場合を除いて、自分よりもはるかに死に近い人がいたことのあるのを速やかに心の底で認める者は滅多にいないからである。したがって、いかに立派な理由があろうとも、突然の死の見込みに青くなつたが、生き延びて死を逃がれた者に対して「臆病者」といた言葉が非常にしばしば当てられることになる。もっとも、恐怖心に逆らわずに死んでしまえば、「臆病者」の「お」の字も耳にすることはない。これは、そういった場面を数多く目撃して来た人の言葉であって、右のような原理が推論されるのもこのためである。この主題はさらに微妙な考察を誘う。というのも、死が、突然、人を脅す時、その人の死についての考え方や行動の中に、その人の人生と信仰に対する最良の指標が見られるからである。いまだキリスト教の時代に入っていない折、ソクラテスはキリスト教徒の死を遂げたし、ヒューム（訳注、ディヴ・ヒューム。「一七一」一七六。スコットラ）は、理論的にはキリスト教徒ではなかったのに、彼もまたキリスト教徒の死——虚勢を張ることなく、謙虚で、安らかな死を迎えたのである。しかも、彼は哲学的懷疑論者の中でも最も懷疑的であつたけれども、全宇宙を覆うあの確固とした、しかも教条にとらわれぬ信仰心に満ちていたのである。セネカ（訳注、前五・後六五。ローマ）は、後世に処世訓を残して死んだ。ペトロニウス（訳注、のローマの作家。目）は、軽妙に物の本質論と恋愛詩を論述して死んだ。アディソン（訳注、ジョゼフ・アディソン。「一六七二」）は、キリスト教世界に向かつてキリスト教徒がいかに静かに死を迎えることができるかを見よと呼びかけたが、右の二人に続く者でありながら、キリスト教徒の最善の死を遂げたのではない。（第五十八章）

(七)

以上、長々しい引用を幾つか書き記してきたが、その意図は、『レッドバーン』という作品において、前作『マーディ』からの連続性というものを、決して声を大きくして強調する積りはないものの、筆者の心に留めておきたかったためである。すなわち、ボーインの言う、「啓蒙された」（その意味は相変らず漠然としているが）、そして、「成熟した」年輩の語り手が物語前半では、主人公レッドバーンの成長を語り、物語後半はその反復であるという説に筆者にあえて異を説える積りはないが、それに加えて、その語り手が語り手としての独自性を発揮する時、彼特有の性癖とでも言うべきものをやはり現わしていること、そして、それは『マーディ』から継続されてきているものではないかと考えるのである。

従来、『レッドバーン』という作品は、ロマンス性を見せていた前作の『マーディ』とは全く異なった作品であると見なされてきた。これは、一つにはメルヴィル自身にも責任のあることで、ノースウェスタン版の「批評史注釈」にも紹介されているように、彼は一八四九年六月五日、英国の出版者リチャード・ベントリー宛に次のような手紙を寄せているのである。

私は今『マーディ』とはひどく違った性格をもったものの準備を進めています。——個人的な経験を平易・直截に楽しく物語ったもので——紳士の息子が水夫として始めて航海に出る——というものですが、形而上学も、円錐曲線も何もなく、あるのはお菓子と麦酒だけです。舞台も南海とは異なった海域に——もっと国に近い方に移しました。そして、その内容は滑稽な状況下に置かれた私自身が行なった観察によってほとんどすべて書かれています^⑥。

つまり、作者自身が、『マーディ』とは全く違った「形而上学も、円錐曲線もない」ただ面白おかしく書い

た自伝風物語だと言明しているわけである。

なるほど『マーディ』と読み較べてみると、全体に、色濃く存在していた虚構性・ロマンス性はほとんど見られず、作者にまつわる事実や経験を基にした（その意味では、『レッドバーン』は『タイビー』や『オム』に近い）物語である^{オットー・ワグネル}と一応は納得される。しかし、すでに見てきたように、語り手の語りの特徴、ないしは語り手の個性という点になると、ちょうど『マーディ』の中での大きい特徴であり、また、そこでは語り手が素顔を見せて語りの秘密をもらしていると思われる「逸脱」の章があったように、この『レッドバーン』でも（それほど目立ったものではないが、それでも決して無視することのできない）語り手自身の顔が見えるのである。そして、それは、ボーインの言う「成熟し」「啓蒙された」語り手という性格づけだけでは納まり切らないものであると思われるのである。

もっとも、だからと言って、メルヴィルはベントリー宛の手紙の中で嘘を言っていると言うのではない。おそらく、それは、知らず知らずのうちに、『マーディ』から継承されてきたささやかな、語りの遺産であると考えられるものである。

注

- ① Herman Melville, *Redburn, His First Voyage* (The Northwestern-Newberry Edition: Chicago, 1969), p. 312. 以下「ハッティーン」からの引用はすべてこの版による。
- ② F. O. Matthiessen, *American Renaissance* (Oxford University Press: New York, 1941. Paperback, 1968), p. 397.
- ③ William H. Gilman, *Melville's Early Life and Redburn* (Russell & Russell: New York, 1951), pp. 208-9.
- ④ Lawrence Thompson, *Melville's Quarrel with God* (Princeton University Press: Princeton, 1952), p. 52.
- ⑤ Merin Bowen, "Redburn and the Angle of Vision", *Modern Philology*, November, 1954.
- ⑥ Jay Leyda ed., *The Melville Log* (Gordian Press: New York, 1969), Vol. 1, p. 306.